

【書評】

桐原翠著『現代イスラーム世界の食事規定とハラール産業の国際化
——マレーシアの発想と牽引力』
(ナカニシヤ出版、2022年)

富沢壽勇

本書は2020年3月に著者が京都大学に提出した博士論文「現代イスラーム世界におけるハラール産業の発展：マレーシアの国際的イニシアティブとハラール認証制度の越境化」を加筆修正したもので、立命館大学の2021年度学術図書出版推進プログラムの助成を受けて2022年3月に刊行されたものである。本書の主たる構成は以下の通りである。

序章 ハラール食品産業の世界展開

第1章 現代世界におけるイスラーム法の規範と展開

第2章 イスラーム世界の現代的変容と多民族国家マレーシア

第3章 イスラーム先進国を目指すマレーシア

第4章 ハラール認証規格の明文化とその形成

第5章 ハラール産業の国際的な拡がり

結論

付録1 マレーシア・スタンダード MS1500:2019「ハラール食品：一般要件（第3版）」

付録2 マレーシアにおけるハラール認証規格一覧

本論頁数192頁に付録2点、参考文献一覧、索引などを加えて総頁数251頁である。

まず序章では本書の主題と目的、対象とする時代と地域、ハラール食品産業がイスラーム経済論、持続型生存基盤論、イスラーム世界論の3つの研究領域にまたがるのが論じられ、先行研究が概観され、本書の意義、研究の問いと方法が示される。第1章ではイスラーム法（シャリーア）における食事規定が詳述され、1970年代以降のイスラーム復興運動とハラール認識の進展との関係が考察される。続いてハラール産業創出の主体が（a）移民／ディアスポラやムスリム知識人、（b）既存企業、（c）国家から構成されるとし、ハラール認証規格がシャリーアとシャリーア以外の行政規則から成り立つことが分析される。そして著者がグローバル・ハラール運動と称するものを支える代表的なムスリム思想家としてアフガニスタン出身でマレーシアで活躍してきたムハンマド・ハーシム・カマリーの越境性、ハラール認証規格の越境性とそれを担ったと著者が主張するムスリム移民／ディアスポラの位置づけが論述される。第2章では、イスラームの商業的性格、伝統的なイスラーム世界の消滅と「現代イスラーム世界」の形成、イスラーム復興運動とムスリ

ムの生存基盤の再構築への動きとの関連、多民族国家マレーシアの歴史背景と民族構成の現状が示される。続く第3章では、同国の開発政策の変遷が概観され、1971年以降の新経済政策から、イスラーム復興（ダアワ）運動の影響を受けつつ展開した1981年以降のイスラーム理念に基づく開発ビジョンを経て、対外的なイニシアティブ獲得のための国家戦略としてのハラール産業政策の展開への流れが示される。そして第4章では、マレーシアのハラール食品認証規格（MS1500）の構造が分析され、それがシャリーア的要素のみでなく、たとえば屠畜の際に動物を気絶させるスタンピング法のような行政規則の要素も入っているとされる。さらに同国のハラール認証規格の実践と国内レストランの現状への考察が加えられ、同国の認証機関 JAKIM の海外認証機関団体との関わり、世界のハラール認証機関とハラール・ロゴの多様化の現状が示される。第5章は「世界中で開催されるハラール・エキスポの事例から」の副題が付けられており、ハラール産業についての多国間比較を行うために、マレーシア、アラブ首長国連邦のドバイ、トルコのそれぞれで2018年から2019年に開催されたハラール・エキスポの現地調査の報告と分析が行われ、ハラール産業は拡大しており、「グローバル・ハラール・ムーブメント」と称する現状が生まれていると著者は主張する。結論の章では、ハラール産業が「ムスリム社会と国際社会の共存を模索するイスラーム社会の適応戦略である」（本書：176）こと、「総じて、現在のハラール産業の拡大は、伝統的なイスラーム世界から現代イスラーム世界へとイスラーム諸社会を架橋し、さらに、イスラームとグローバル社会の共存を具現化したもの」（本書：182）と結んでいる。

以上のように、本書の主題に直接関わる第1章、副題のマレーシアの事例研究に関わる第2、3、4章、そして、マレーシアを含めたイスラーム世界に視野を拡げた第5章（実質的には3地域のハラール・エキスポの比較）を経て結論が導かれるという構成である。

まず読後感であるが、博士論文を土台にした論考にもかかわらず、全体の論述が十分組織化されておらず、誤字脱字、用語法や表記法の不統一、図表と本論での説明内容との不一致、意味不明もしくは不正確な記述が多数あり、著者の見解を支える根拠や出典が明示されていない箇所も少なくない。1つの章に箇条書きが何種類も登場するので、かえって論点がぼやけて逆効果になってしまっている箇所も繰り返し現れる。これらの形式上の諸問題が本書の考察内容自体にも本質的に関わっている場合はとりわけ問題になる。ここでは紙面の制約上、重要と思われた以下の2点に絞ってコメントしておきたい。

(1) ハラール認証規格と国際化、グローバル化の関係のとらえ方について

まず、本書を通読して終始気になったのは、マレーシアを中心としたハラール食品認証規格と国際化の関係に言及する脈絡で、著者がシャリーアの側面を重視するあまり、認証規格に内蔵されているさまざまな国際規格の要素が等閑視され、イスラームの越境性、シャリーアの普遍性が過度に強調されていることである（本書：58; 103）。現代のハラール食品認証規格化の国際的拡大は、HACCP、GMP、GHPなどの食品の安全性、品質保証、

衛生性などを担保する世俗的な国際規格が組み込まれていることが大きく、イスラームの要素に重心を置いたとらえ方のみで説明するのは困難だからである。「ハラール=イスラーム」と捉えるのは「乱暴な議論」だと著者は自覚しつつ（本書：11）、考察の実態はそれに近いものになっている。換言すれば、従来の研究に「ハラール産業のグローバル性の考察」が欠如していると批判しつつ（本書：11）、そのグローバル性の主要因をイスラーム、シャリーアの性格に求める論理矛盾に陥っている。ハラール産業のグローバル化についての内外も含めた先駆的論考として富沢（2007）を挙げてよいと思うが、著者がこれをどう読んだのか、あるいは、読んでいないのか不明である。そこでも触れられていることだが、マレーシア政府をはじめ、ハラール産業の推進者たちは早くから、同産業の想定する消費者としてムスリム、非ムスリム双方を包摂するものとして構想し、また生産者もムスリムのみならず非ムスリムも積極的に関わっている実態があり、それを可能にしているのはハラール認証規格がイスラーム的要素と世俗的な国際規格を組み込んでいるからでもある。ハラール食品の国際化、国際規格化をテーマにする本書の立場からすれば、Riaz and Chaudry（2004; 2019）は必読書だと思うが、これも著者の文献目録には残念ながら見当たらない。

第1章ではシャリーアの食事規定が考察され、食用に該当する生物/該当しない生物についてのスンナ派の四大法学派の見解の異同点が3つの比較対照表を通じてわかりやすく整理されており便利である。しかし、表3ではマーリク学派では犬がハラームとされているのに、本論では「マーリク学派では、犬はすべて清浄」と矛盾した記述が見られ、混乱している（本書：35）。現代のハラール認証を決定する際に重要な役割を果たしている用語として、イスティハーラ（原料の性質の変換）やイスティフラーク（原料の純度の維持）についての考察があり（本書：55）、これは本書の中で最も興味深い箇所の一つである。これらの用語がマレーシアや他地域のハラール認証の具体的実務現場でどのように適用され議論されているかさらに知りたいところだが、そこに踏み込んだ記載はなく、今後の研究に期待したい。

また、マレーシアのハラール食品認証規格 MS1500 には、マレーシアで適用されるシャリーアがシャーフイー法学派のみならず、ハナフィー、マーリク、ハンバルの各法学派の法規定で国王や各州統治者が承認したものを含むと記載されており、そのことは著者も十分認識しつつ（本書：116; 204）、その指摘のみでざらりと通り過ぎてしまっている。しかしこの記載を読むと、シャリーアの視点から MS1500 を考察するなら、同規格が成立する過程でシャーフイーを中心四大法学派のハラール解釈で相互にどのような議論やすり合わせがなされたのか（あるいは、なされなかったのか）という疑問が湧いてくる。この点もシャリーア研究に関わってきた著者には是非今後解明してほしいと思う。

(2) ハラール認証食品とハラール食品の関係のとらえ方について

本書においては、おそらく事実認識もしくは表現力のいずれかに問題があるため、大き

な誤解を招く箇所がいくつかあった。たとえば、第4章と第5章では「ハラール食品や製品（・・・）が世界的に拡大している」ことを明らかにしたと著者は言うが（本書：176）、ここでは「ハラール食品」と「ハラール認証食品」が混同されている。後者は主に今世紀に入って急速に増えているとは言えるが、前者は認証制度以前の遙か昔からムスリムとともに存在してきたはずだからである。ここは正確には「ハラール認証食品や製品」と記述すべきである。ハラール・ビジネス関係者やマレーシアのハラール産業研究者は、ハラール食品＝ハラール認証食品と同一視してしまう傾向があるが、このとらえ方はイスラーム世界全般に適用できるものではない。ムスリムが店主、料理人であるレストランなどでハラール認証をとっていない店はマレーシアも含めて世界的にも一般的であり、ムスリムの顧客もそこで問題なく食事するのは自然な光景だが、著者がドバイや英国のアフガニスタン・レストランがハラール認証をとっていない理由を一生懸命探ろうとしているのも「ハラール食品＝ハラール認証食品」の思い込みが作用しているように思われた（本書：59-64）。また、マレーシアで「ノン・アルコール」、「ノー・ポーク」と表示するレストラン等を例に、「ハラール認証の意味の拡大が生じている」と著者は主張するが（本書：127-128）、これらはハラール認証をとっていない店と推察されるので、「ハラール認証の意味が拡大している」とするのは誤りであろう。加えて、仮に「ハラール認証食品が拡大している」として変化の問題を指摘するにも注意が肝要である。関連の生産者が増え、商品も増え、エキスポなどのプロモーション活動も活発になっているのは確かだが、ハラール認証食品の消費がどの程度拡大しているか詳細は不明だからである。ハラール認証食品の受容をめぐる消費行動の実態については、Fischer（2011）等の研究で明らかにされたように、かなり多様な側面が大きい。著者は先行研究の検討において「ハラール産業をイスラーム経済の経済活動の一環として位置づける視点」が欠如してきたことを指摘しており（本書：11）、経済活動の重要な要素である消費次元の考察は著者の問題関心にあるムスリムの生存基盤構築の動態を明らかにする上でも欠かせない手続きであろう。その意味でも参考文献にある Fischer のマレー・ムスリムの消費行動に関する先行研究をどう読んだのかも本論ではほとんど言及されておらず気になるところである。

紙面の余白も限られているので、この辺でひとまず筆を置くことにして最後に一言。

本書の中心課題であるハラール認証のグローバル規格、国際規格の達成はまだ途上であり、同産業関係者の間の悲願であり続けているが、それは著者がたびたび指摘する「ウンマの複雑性」が関係していると考えても差し支えないであろう。この課題を解決するためには、さまざまなハラール産業の認証実務の現場での課題を本書のようにシャリーアの視点で具体的に逐一検証しながら問題解決の糸口を探って行く作業を積み重ねて行くことが肝要だと思われる。その意味で本書が提示している視座はきわめて貴重となる。これを1つの出発点として、著者にはさらに深く精緻なハラール産業研究を進めて行くことを期待したい。

〈参考文献〉

富沢寿勇（2007）「グローバリゼーションか、対抗グローバリゼーションか？——東南アジアを中心とする現代ハラール産業の立ち上げとその意義」小川了編『資源人類学 04 躍動する小生産物』弘文堂、317-348。

Fischer, Johan (2011) *The Halal Frontier: Muslim Consumers in a Globalized Market*, New York: Palgrave Macmillan.

Mian N. Riaz and Muhammad M. Chaudry eds. (2004) *Halal Food Production*, Boca Raton: CRC Press.

—— (2019) *Handbook of Halal Food Production*, Boca Raton: CRC Press.

（とみざわ・ひさお 静岡県立大学）

2023年4月29日掲載決定